

体験！発見！ジオパーク(防災編)

1. 事業の概要

○ 事業の趣旨

室戸ユネスコ世界ジオパークを構成している自然や文化、産業について学ぶ体験活動を通して、大地の誕生や生命の営みについての興味・関心を高める。

○ 実施期間

平成30年9月22日(土)～平成30年9月24日(月) 2泊3日

○ 対象者・参加者数(人数/定員)

小学4年生から6年生までの児童 22名/20名

○ 活動プログラム

9月22日〔土〕	9月23日〔日〕	9月24日〔月〕
12:35 開講式	6:15 災害時に役立つアウトドアクッキングⅡ	6:15 災害時に役立つアウトドアクッキングⅣ
12:45 学習1 ジオパークセンター見学	9:15 フィールドワーク(吉良川地区)	9:00 学習のまとめ
14:00 学習2 津波シェルター見学	12:10 防災食試食体験	11:15 成果発表
14:50 学習3 非常持出袋の中身を考えよう。	14:00 ロープワーク	12:00 昼食
17:00 災害時に役立つアウトドアクッキングⅠ	15:30 災害時に役立つアウトドアクッキングⅢ	13:00 閉講式

2. 活動の様子

<1日目>

昼食と開講式の後、室戸ジオパーク推進協議会地理専門員の中村有吾氏の解説で南海トラフ巨大地震発生のメカニズム等について学習した。佐喜浜地区に移動し、津波シェルターの見学をした。津波シェルターの設備やシェルターがなぜできたか、災害時の活用方法について室戸市役所防災対策課職員から聞き取りをした後、非常持出袋の中身について考えた。懐中電灯や電池、薬、非常食等の意見が出た。水の量を具体的に考えてもらうと、「1日2Lとして3日で6L」「ペットボトル3本」等の意見が出てきた。夕食は災害救助用炊飯袋を使用している炊飯だった。かまどを作りや火おこしに時間を要したため日没になり、ライトをつけて食事をした。班の仲間で声をかけながら薪を探したり、米を洗ったりしながら仲間とのつながりを深めていった。夕食後はレスキューシートに身を包んで21時頃眠りについた。



<2日目>

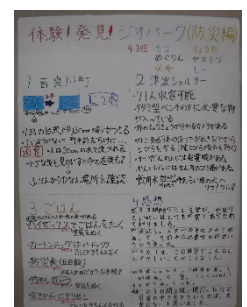
起床予定は6時だったが、すでに起きだしている子供が多かったので、起きた子供から夕食に使用する竹を切り、竹飯づくりの準備をした。朝食の食材が届くとカートンドッグ作りに取り掛かった。牛乳パックの中にアルミホイルで包んだパンを入れ、それを燃やすだけでホットドッグが簡単

にできることに驚いていた。パンの焦げ目を友達と比べながら楽しく食べていた。朝食後は本館へ移動し、バスに乗り吉良川地区に向かった。吉良川まちなみ駐車場に到着後、津波避難マップを使って地域めぐりをした地点の津波浸水高を確認していった。最後の神社や公民館が避難場所になっている理由を知り、津波の怖さを実感していたようだった。昼食はアルファ化米を試食した。水で1時間戻しただけの簡単な調理でおいしい食事ができることに驚いた。午後の活動はロープワークとカレーライスづくりだった。ロープワークは本結びや8の字結び、まき結びが結べるようになった後、ブルーシートでタープテントを作った。夕食は切った竹でご飯を炊き、食料保存袋を使ってカレー作りをした。日没が迫り薄暗くなる中での食事とその後片付けでは、灯りの大切さを改めて感じる機会となったようだ。夜は1日目と同じくレスキューシートに身を包んで21時頃眠りについた。



<3日目>

最終日の朝食はアルミ缶でご飯を炊き、それを班の仲間とおにぎりにして食べた。アルミ缶350mlで1合のご飯が炊けることに参加者は驚いていた。「おいしい!」と言って楽しそうに食べる参加者もいた。朝食を食べて落ち着いた後、4つの班が2日間の学習の成果を班ごとにまとめ、発表した。発表の中で参加者は「災害の中で生きていくのは大変だなあ。」「自分も人の命も大切にしないといけない。」と感想を述べていた。班でまとめたものは室戸世界ジオパークセンターで展示をしていただいている。今後30年以内に発生する確率が70%~80%と高い南海トラフ巨大地震、今回の事業をきっかけとして生活環境にあった備えを考え、準備してほしいと願っている。



3. 事業の成果と課題

○ 参加者の感想

- ・災害後の生活はそうとうかこくなんだなあと思った。
- ・自分もみんなの命も大切にしないといけないので、訓練などをして備えておかないといけない。
- ・光がなかったので、食べることや後片付けをするのが大変でした。

○ 事業の成果

- ・室戸市役所防災対策課の協力のもと津波シェルターを見学することができ、普段体験できない体験を事業に取り入れることができた。
- ・津波シェルターや避難所等を見学することで、県や市は防災・減災に向けて取り組んでいることを知り、災害に備えて自分はどのようなことができるのか考えるきっかけとなった。
- ・水や電気等のライフラインが制限される生活の中で、自己主張しながらも互いに協力し合うことで班の絆も深まっていった。

○ 事業の課題

- ・今回の事業は天候に恵まれすべてのプログラムを実施することができたが、雨天時荒天時には野外炊事プログラムが課題となる。